

やまと 民俗への招待

へ世の中がよければ、世の中がよければ、世の中がよければ
 1月18日夜7時ごろ、平尾(宇陀市)のオンド(御田植)行事は、この言葉で始まる。水分神社境内には3つの四方の舞台が設けられ、東西二つの宮講から大當と小當がそれ一人ずつ、さらにショトメ(早乙女)役を務める子どもたちが乗って、苗代作りから田植えまでを演じる。

「えんやっと打ち起
こして候えば、餅ございの香がほっとした」(鍵初め)、「一」
 の国から墨田打つ男の子が、打ちや始めし所よし世よし(苗代角打ち)、「福德恵方の方より、澄みに澄んだる水を、くわっくわっくわっ」(水入る事)、「まこよ、まこよ、福の種をまこうよ」(種まき)などと寒空に響き渡るように大夫役の大當が唱えると、周囲の人々は「ここちょうし」と掛け合いをする。



平尾のオンド行事で、モミまきをする大夫(中央)。右は小當、左はショトメ
—筆者提供

「世の中」幸願う行事

登場する。翁面を着けてあり、痛む所のコケた人形だが、顔や身のヨリを貢ぐと治るもの。その核となる言葉が「世の中」である。「世の中」とは「豊作」そのものを意味したが、今年もいい世の中だ、そうになるに違いないと神前で土地の人があ

は多いが、定まった古風な詞章を伴い、管絃の音楽が流れ、正月の習わしだった。木地屋集落の篠原(現五條市)にも「世の中踊り」という曲がある。「去年より今年は皆世の中で、所々に倉が建つ」という歌詞にも、平穏無事で少しでも富み栄えるようになつてほしいという願いが込められている。波乱続きの近年。今年こそ、いい「世の中」になつてほしいものだ。

(奈良民俗文化研究所
代表・鹿谷勲)